

GREEN ISSUE —「みどり」を求めて—

熊本県知事 細川 護 熙



杞 憂

「杞憂」という言葉があります。中国の故事で杞の国に今にも天が崩れ落ちてつぶされはしないかと心配して寝食もできない人がいたということから、「あれこれといらぬ心配をする」、「取り越し苦労」の意とされています。昨今の地球環境の変化をみれば、この杞の国の人の憂いが現実のものとなってきているようです。

私たちが何気なく使っているスプレー製品や生活に欠かせない冷蔵庫・エアコン、こういったものに使用されているフロンガスが、地球をとりまわっているオゾン層を徐々に破壊しつつあり、今ではオゾンホールと呼ばれる穴が観測されていると報じられています。地球をとりまくオゾン層は、地上の生物を太陽紫外線から保護するもの、いわば夜露をしのぐ屋根、天井にあたるものであり、これに穴が空くということは、すなわち杞の国の人の憂いが現実のものになってきているとも言えるでしょう。

このオゾン層の問題に限らず、私たちは、熱帯雨林の破壊による地球の温暖化や砂漠化、工場や自動車の排ガスによる酸性雨の問題など、地球規模での環境問題に直面しています。

地球が誕生して46億年、人類がこの地上に出現して350万年、そしてこの急速な破壊はわずかここ30年ほど前から起こっていることなのです。

人類の誕生以来、営々と受け継がれ、私たちに大きな恵みを与え続けてきたこの豊かな自然環境を、子孫の代には荒廃、汚染しきった環境としてしか残せないような事態にでもなろうものなら…考えるだけでも恐ろしいことです。豊かな自然環

境を一気に食いつぶして享受している私たちの生活や、それをもたらした文明や科学技術の進歩の意味について改めて考えさせられる問題です。

この問題については現在も数多くの国際会議が開かれ、国家という枠組みを超えた論議が続けられていますが、われわれの将来に直接関わる問題でもあり、実りある論議と断固たる実行がなされることを期待しています。そして、「杞憂」は「杞憂」として終わらせなければなりません。

グリーン・イシュー

さて、私は熊本県政をおおざかりして8年目を迎えています。この間、基本理念として一貫して追求してきたのは「みどり」(Green Issue)です。

私の言う「みどり」とは、ただ単に街や農村の緑を増やすということではなくて、水質や農業の問題、あるいは景観や音、臭い、あるいは廃棄物、さらには地球環境など、すべてを含んだものです。

本県はかつて、水銀のたれ流しによる環境破壊という原体験を持っており、それだけにどこよりも先駆けて、また、どこよりも先進的にとりくみをしていかなければならないと思っています。

これまで本県では、緑、水、そして文化という3つの視点からさまざまなとりくみを行ってきました。

まず、緑については、質の高い緑を増やし豊かな自然を守り育てていくことを目標として10年間で緑を3倍に増やす「緑の3倍増計画」

や、1つ1つのコミュニティに鎮守の森のようなグリーンスポットを作っていく「一村一森運動」といったものを推進してきました。また、きれいな街づくりに関しても全国に先駆けた景観条例の制定や、全国でも厳しい規制内容となっている屋外広告物条例の制定、このほか電線類の地中化、モデル広告板の設置などにも積極的にとりくんできました。

水についても、全国でも厳しい地下水保全のためのコードの制定、熊本市民のオアシスとなっている水前寺・江津湖の再生、ゴルフ場における農業の安全使用の指導徹底等に力を入れてきました。

文化については、文化振興基本条例の制定。私は常々、職員をはじめ県民の皆様に「後世に残るものは文化しかない」と申し上げてきており、この条例によって文化に対する基本的な考え方と具体的な方策についてお示しました。また、2年ほど前から県内各地で展開している「アートポリス」構想。これは新しく作られる建築物一橋や公衆トイレなどまで含めた公共建築物はもちろんのこと一部民間で理解をいただいたものまで含めて一について、単に効率を追求したものではなく後世に文化遺産として残せるようなものにしようとするものです。2年後の92年には建築展として内外に一堂に紹介しようと準備しています。

魅力のある田園文化圏の創造

現在、さらに進めているのは、こうした「みどり」の問題を全体的にふまえながら本県の環境政策の基本となる条例の制定であり、これによって全国に先駆けた環境問題に対する考え方を示したいと考えています。このほか、本県の豊かな自然環境に生息する希少野生動物の保護に関する条例制定なども検討しています。

こういった関係条例を整備するとともに、たとえば、本県の基幹産業である農業についてもこのグリーン・イシューにからめて積極的に展開しよ

うと思っています。熊本型有機農業や減農薬運動の推進がそれです。消費者の安全・健康志向にこたえながら自然生態系をうまく利用して高い収益性をめざそうというものです。

これからの行政は、「開発」と「保護」、「発展」と「維持」といった一見矛盾するような命題を、いかに調和させ、具体化していくかが大きな課題であろうと思っています。

いずれにしろ、この「みどり」という基本理念に立ってめざしているものが「魅力のある田園文化圏の創造」であり、また、「アメニティの先進県」であり、そうした目標に向けてさまざまなとりくみを進めるなかで、まさにお互いが確かな手ごたえとして豊かさを実感できる、そのような生活空間をこの熊本につくりあげたいと願っているわけです。

熊本から世界へ

私は、豊かな自然環境が美しい花を育てるように、優れた社会生活環境こそ、優れた人材を育て上げるものと信じています。

とはいえ、緑や水、文化といったものまで含めた社会生活環境の整備は、1日にして成るものではないでしょう。そういった意味では、いま熊本で試みていることは、種を蒔いてようやく芽が出はじめた段階とも言えるでしょうが、将来、この芽は必ずやその実を結んでくるものと確信しています。

26億年も前から地球の生態系を維持してきたシステム、「グリーンシステム」は、地球上のあらゆる生きものが等しく共有する財産であり、ひとり人間だけのものではないはずで、自然との調和のなかでいかに生活の豊かさを確保していくか、これこそがグリーン・イシューの目標だと考えています。私は、熊本のこうしたとりくみが、世界に向けて1つの大きな試金石になるものだと信じています。